一　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があって、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。椅子から立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、

「①呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こっちへ寄ってきた。ルロイ修道士が日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には②年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんですよ。しばらくでした。」

ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ヶ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた③「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの「べからず集」があった。子供の考え出したものであるから、べつにたいしたべからず集ではなく、「朝のうちに弁当を使うべからず。(見つかると、次の日の弁当がもらえなくなるから)」、「朝晩の食事は静かに食うべからず。(ルロイ先生は、園児がにぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから)」、「洗濯場の手伝いは断るべからず。(洗濯場主任のマイケル先生は気前がいいから、きっとバター付きパンをくれるぞ)」といった式の無邪気な代物で、その中に、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず。(二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ)」というのがあったのを思い出して、それで少しばかり身構えたのだ。この「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、天使園に収容されたときの光景を引っ張り出した。

風呂敷包みを抱えて園長室に入っていったわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、

「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」

と言ってくれたが、彼の握力は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちのひじが机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。

だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。それから、このケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。やがて注文した一品料理が運ばれてきた。ルロイ修道士の前にはプレーンオムレツが置かれた。

「おいしそうですね。」

ルロイ修道士はオムレツの皿をのぞき込むようにしながら、両のてのひらを擦り合わせる。だが、彼のてのひらはもうギチギチとは鳴らない。あの頃はよく鳴ったのに。園長でありながら、ルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けていた。たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた。そのために、彼の手はいつも汚れており、てのひらは樫の板でも張ったように固かった。そこで、あの頃のルロイ修道士の汚いてのひらは、擦り合わせるたびにギチギチと鳴ったものだった。

「先生の左の人さし指は、相変わらず不思議なかっこうをしていますね。」

フォークを持つ手の人さし指がぴんと伸びている。指の先の爪は潰れており、鼻くそを丸めたようなものがこびりついている。正常な爪はもう生えてこないのである。あの頃、ルロイ修道士の奇妙な爪について、天使園には④こんなうわさが流れていた。日本にやって来て二年もしないうちに戦争が始まり、ルロイ修道士たちは横浜から出帆する

最後の交換船でカナダに帰ることになった。ところが日本側の都合で、交換船は出帆中止になってしまったのである。そして、連れていかれたところは丹沢の山の中。戦争が終わるまで、ルロイ修道士たちはここで荒れ地を開墾し、みかんと足柄茶を作らされた。そこまではいいのだが、カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、ルロイ修道士が代表となって監督官に、「日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは、他の曜日にきっとする。」と申し入れた。すると監督官は、「大日本帝国の七曜表は月月火水木金金。この国には土曜も日曜もありゃせんのだ。」と叱りつけ、見せしめに、ルロイ修道士の左の人さし指を木づちで思い切りたたき潰したのだ。だから気をつけろ。ルロイ先生はいい人にはちがいないが、心の底では日本人を憎んでいる。いつかは爆発するぞ。……しかし、ルロイ先生はいつまでたっても優しかった。そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている。これはどういうことだろう。

「ここの子供をちゃんと育ててから、アメリカのサーカスに売るんだ。だから、こんなに親切なんだぞ。あとでどっと元をとる気なんだ。」というわさも立ったが、すぐ立ち消えになった。おひたしや汁の実になった野菜がわたしたちの口に入るところを、あんなにうれしそうに眺めているルロイ先生を、ほんの少しでも疑っては罰が当たる。みんながそう思い始めたからである。

「⑤日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。交換船の中止にしても国際法無視ですし、木づちで指をたたき潰すに至っては、もうなんて言っていいか。申し訳ありません。」

ルロイ修道士はナイフを皿の上に置いてから、右の人さし指をぴんと立てた。指の先は天井を指してぶるぶる細かく震えている。また思い出した。ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、右の人さし指をぴんと立てるのが癖だった。

「総理大臣のようなことを言ってはいけませんよ。だいたい、日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押し潰したようなかっこうのプレーンオムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちっとも口へ運んではいないのだ。

「それよりも、わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか、もし、していたなら、謝りたい。」

「⑥一度だけ、ぶたれました。」

ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。これは危険信号だった。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次には、きっと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちは痛かった。

「やはりぶちましたか。」

ルロイ修道士は悲しそうな表情になって、ナプキンを折り畳む。食事はもうおしまいなのだろうか。

「でも、わたしたちは、ぶたれてあたりまえの、ひどいことをしでかしたんです。高校三年のクリスマスだったと思いますが、無断で天使園を抜け出して東京へ行ってしまったのです。」

翌朝、上野へ着いた。有楽町や浅草で映画と実演を見て回り、夜行列車で仙台に帰った。そして待っていたのがルロイ修道士の平手打ちだった。「あさっての朝、必ず戻ります。心配しないでください。捜さないでください。」という書き置きを、園長室の壁に貼りつけておいたのだが。

「ルロイ先生は一月間、わたしたちに口をきいてくれませんでした。平手打ちよりこっちのほうがこたえましたよ。」

「そんなこともありましたねえ。あのときの東京見物の費用は、どうやってひねり出したんです。」

「それはあのとき白状しましたが……。」

「わたしは忘れてしまいました。もう一度教えてくれませんか。」

「準備に三か月はかかりました。先生からいただいた純毛の靴下だの、つなぎの下着だのを着ないでとっておき、駅前の闇市で売り払いました。鶏舎から鶏を五、六羽持ち出して、焼き鳥屋に売ったりもしました。」

ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける。ただしあの頃と違って、顔は笑っていた。

「先生はどこかお悪いんですか。ちっとも召しあがりませんね。」

「少し疲れたのでしょう。これから仙台の修道院でゆっくり休みます。カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」

「だったらいいのですが……。」

「仕事はうまくいっていますか。」

「まあまあといったところです。」

「よろしい。」

ルロイ修道士は右の親指を立てた。

「仕事がうまくいかないときは、この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせってはなりません。問題を細かく割って、一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」

冗談じゃないぞ、と思った。これでは、遺言を聞くために会ったようなものではないか。そういえば、さっきの握手もなんだか変だった。「それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。」というように感じたが、実はルロイ修道士が病人なのではないか。元園長は何かの病にかかり、この世のいとまごいに、こうやって、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「日本でお暮らしになっていて、楽しかったことがあったとすれば、それはどんなことでしたか。」

先生は重い病気にかかっているのでしょう、そして、これはお別れの儀式なのですねときこうとしたが、さすがにそれははばかられ、結局は、平凡な質問をしてしまった。

「それはもう、こうやっているときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るときがいっとう楽しい。何よりもうれしい。そうそう、あなたは上川君を知っていますね。上川一雄君ですよ。」

⑦もちろん知っている。ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子だ。捨て子は春になるとぐんと増える。陽気がいいから、発見されるまで長くかかっても風邪を

引くことはあるまいという、母親たちの最後の愛情が春を選ばせるのだ。捨て子はたいてい姓名がわからない。そこで、中学生、高校生が知恵を絞って姓名をつける。だから、忘れるわけはないのである。

「あの子は今、市営バスの運転手をしています。それも、天使園の前を通っている路線の運転手なのです。そこで、月に一度か二度、駅から上川君の運転するバスに乗り合わせることがあるのですが、そのときは楽しいですよ。まずわたしが乗りますと、こんな合図をするんです。」

ルロイ修道士は右の親指をぴんと立てた。

「わたしの癖をからかっているんですね。そうして、わたしに運転の腕前を見てもらいたいのでしょうか、バスをぶんぶん飛ばします。最後に、バスを天使園の正門前に止めます。停留所じゃないのに止めてしまうんです。⑧上川君はいけない運転手です。けれども、そういうときがわたしにはいっとう楽しいのですね。」

「いっとう悲しいときは……？」

「天使園で育った子が世の中に出て結婚しますね。子供が生まれます。ところがそのうちに、夫婦の間がうまくいかなくなる。別居します。離婚します。やがて子供が重荷になる。そこで、天使園で育った子供が、自分の子を、またもや天使園へ預けるために長い坂をとぼとぼ上ってやって来る。それを見るときがいっとう悲しいですね。なにも、父子二代で天使園に入ることはないんです。」

ルロイ修道士は壁の時計を見上げて、

「汽車が待っています。」

と言い、右の人さし指に中指をからめて掲げた。これは「幸運を祈る」「しっかりおやり」という意味の、ルロイ修道士の指言葉だった。

上野駅の中央改札口の前で、思い切ってきいた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、⑨ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば、何もないただむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために、この何十年間、神様を信じてきたのです。」

わかりましたと答える代わりに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。⑩わたしたちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。葬式でそのことを聞いたとき、わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

問一　傍線部①「呼び出したりしてすみませんね」とあるが、何のために「わたし」を呼び出したのか。九字で抜き出しなさい。

問二　傍線部②「年季が入っている」とあるが、この言葉のここでの意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　長い間生きてきた経験により、深い知恵が身につくこと。
イ　歳を重ねたことにより、堂々とした風格がつくこと。
ウ　年月を過ごしてきたことにより、盛りが過ぎたこと。
エ　長年修練を積んだことにより、熟達した技術があること。

問三　傍線部③『天使の十戒』を頭に浮かべた」とあるが、なぜか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　天使園に収容された日のことを思い出したから。
イ　ルロイ修道士が帰国することが寂しかったから。
ウ　ルロイ修道士の握手の力強さを思い出したから。
エ　ルロイ修道士の手が以前より小さく感じたから。

問四　傍線部④「こんなうわさ」とあるが、ルロイ修道士に対してどのような「うわさ」が流れていたのか。「…というわさ。」に合うように、それぞれ十五字以内で二つ書きなさい。

問五　傍線部⑤「日本人は先生に対して、ずいぶんひどい……申し訳ありません」と言った「わたし」に対し、ルロイ修道士はどのように戒めているか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　人間は、一人一人が自分で考えて行動しなければならない。
イ　国がしたことの謝罪を個人が行うのは傲慢であり、許されない。
ウ　総理大臣でもないのに、国の外交に関することを口にしてはならない。
エ　自分が国を代表しているかのように、傲慢な物言いをしてはならない。

問六　傍線部⑥「一度だけ、ぶたれました」とあるが、なぜ「わたし」はぶたれたのか。いつどんなことをしたのか明確にして、その理由を三十五字以内で書きなさい。

問七　傍線部⑦「もちろん知っている」とあるが、なぜこのように答えたのか。その理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　暖かい春に捨てられる子は、発見されるまでに長くかかるので印象に残りやすいから。
イ　小さいうちに捨てられて、姓名がわからず自分たちで考えて名付け親になるから。
ウ　天使園の前に捨てられた子は姓名がわからずとも、母親たちの愛情が感じられるから。
エ　私とルロイ修道士にとって思い出深い春の陽気な日に、天使園の前に捨てられていたから。

問八　傍線部⑧「上川君はいけない運転手です」とあるが、この時のルロイ修道士のようすとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　上川君が自分のためとはいえ、バスを乱暴に運転してしまうことに申し訳なく思っている。

イ　上川君がわたしのためだけに、天使園の前にバスを停めてくれることを楽しく思っている。

ウ　上川君がバスの運転手として、張り切って働いている姿を見られることをうれしく思っている。

エ　上川君が乗客のために責任もってバスを運転し、人々の役に立っていることを誇らしく思っている。

問九　傍線部⑨「ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　死ぬことは恐れてもいないのに、死ぬのは怖くないのかという質問に挑発されていると思ったから。

イ　自分が来たのは、この世のいとまごいをするためだったことを見抜かれて気恥ずかしかったから。

ウ　天国があるかどうかルロイ修道士自身がわからないのに、核心をついた質問をされて困ったから。

エ　家族のように過ごしてきた自分の教え子に対して、改めて天国の話をすることが照れくさかったから。

問十　傍線部⑩「わたしたち」を別の言葉で言い換えた部分を文章中から九字で抜き出しなさい。

問十一　『握手』の課題解決にA君は次のような課題を立て、結論を導き出した。この結論にあたる根拠を書きなさい。ただし、次の条件に従うこと。

課題　握手の主題は何か。

結論　人の幸せが自分の幸せであるといった人間愛があふれるルロイ修道士と私の心のつながりが本作品の主題なのである。

条件①根拠の書き出しは「一つ目は…。二つ目は…。」とすること。

②文字数は問わないが、結論を証明できる根拠となる部分を二つ挙げて記述をすること。

③本文を引用する場合は「　」を使用すること。

④文末は統一すること。

⑤丁寧に楷書で書くこと。

二　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

（　A　）は、中国古代の思想家・（　B　）と、その弟子たちの言行録である。弟子たちは師の言葉を、励ましとして、あるいは戒めとして、よりどころにしてきたことだろう。そうした言葉を後世に残そうと編まれたものが（　A　）という書物である。

（　A　）に収められた短い言葉の中には、人間の生き方についての鋭い観察や深い思索が込められている。だからこそ、二千五百年以上前の言葉が今も読み継がれているのだ。

次に示す四つの章句を声に出して読み、（　B　）の考え方に触れてみよう。また、（　A　）には、他にも数多くの名言が収められている。自分たちの生活に生かしていきたい言葉や、自らを励ます言葉、友達や後輩に贈りたい言葉を見つけてみよう。

子曰はく、「①学びて時にこれを習ふ、②また説ばしからずや。
朋遠方より来たるあり、また楽しからずや。
人知らずして慍みず、また君子ならずや。」と。

子曰、「学而時習之、不亦説乎。
有朋自遠方来、不亦楽乎。
人不知而不慍、不亦君子乎。」（学而）

子曰はく、「③温レ故而知レ新、もつて師たるべし。」と。

子曰、「温故而知新、可以為師矣。」（為政）

子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔し。④思ひて学ばざれば則ち殆し。」と。

子曰、「学而不思則罔。思而不学則殆。」（為政）

子曰はく、「⑤これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず。」と。

子曰、「知之者、不如好之者。
好之者、不如楽之者。」（雍也）

問一　傍線部①「学びて時にこれを習ふ」とあるが、ここでの「学ぶ」と「習ふ」にはどのような意味があるか。それぞれ記号で答えなさい。

①学ぶ

ア　教えを受け、教養を身につけること。　イ　無知を自覚すること。

ウ　人に新しい知恵を授けること。　エ　知らないとは言わないようにすること。

②習ふ

ア　予習をしておいて理解を早めること。　イ　復習をして理解を深めること。

ウ　復習をして次の疑問を発見すること。　エ　復習をして友に教えること。

問二　傍線部②「また説ばしからずや」を現代語訳に直しなさい。

問三　傍線部③「温レ故而知レ新（メテキヲレバシキヲ）」について、

（1）書き下し文を書きなさい。

（2）その言葉の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　古いものを大切にして、新しいものを遠ざけること。

イ　古いことを学んで、新しい友を得ること。

ウ　昔のことを調べて、そこから新しい知識や見解を得ること。

エ　昔のことを思い返して、そこから新しい時代に前向きになること。

問四　傍線部④「思ひて学ばざれば則ち殆し」とあるが、なぜ「殆し」といっているのか。具体的に書きなさい。

問五　次の会話は傍線部⑤の内容についてクラスで話し合いをしたときの内容の一部である。B君の会話文の［　　］に入る言葉を、四十字以内で書きなさい。

A君…孔子が述べていることを、現代の僕たちの生活の中のできごとを例にして説明すると、どうなりますか。

B君…たとえば野球をすることを例にして説明すると、ルールや選手について詳しく知っている人は［　　］ということではないでしょうか。

問六　文章中の（　A　）（　B　）に当てはまる語句を漢字で答えなさい。

三　傍線部分の漢字には読み仮名を、平仮名は漢字に直しなさい。ただし、とめ、はねに気をつけて丁寧に楷書で書くこと。必要な場合は、送り仮名を書きなさい。

① 貨物船が出帆する。　② がれきのてっきょ。　③ 冊子を頒布する。　④ いきな計らいをする。　⑤ 消化こうその働き。

⑥ 歌で気をまぎらす。　⑦ ひさんな話を聞く。　⑧ 市役所の出納係。　⑨ かんさんとした店内。　⑩ 塑像を展示する。

⑪ 世間とかくぜつする。　⑫ のきしたで雨宿りをする。　⑬ 息子を溺愛する。　⑭ ずいひつを書く。